

保育内容「環境」における保育者養成校での授業内容の 検討

— 先行研究の分析を通して —

河野 崇

I. はじめに

平成 29 年 3 月 31 日、学校教育法施行規則が改正されるとともに、幼稚園教育要領、小学校学習指導要領及び中学校学習指導要領が公示された。幼稚園教育要領は、平成 30 年 4 月 1 日から実施されている⁽¹⁾。幼稚園教育要領の改訂については、中央教育審議会答申を踏まえ、次の基本方針に基づき行われている⁽²⁾。

幼稚園教育において育みたい資質・能力として、「知識及び技能の基礎」、「思考力・判断力・表現力等の基礎」、「学びに向かう力、人間性等」の三つを示し、幼稚園教育要領の第 2 章に示すねらい及び内容に基づく活動全体によって育むこととした。また、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」（「健康な心と体」「自立心」「協同性」「道徳性・規範意識の芽生え」「社会生活との関わり」「思考力の芽生え」「自然との関わり・生命尊重」「数量・図形、標識や文字などへの関心・感覚」「言葉による伝え合い」「豊かな感性と表現」）を明確にし、これを小学校の教師と共有するなど連携を図り、幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続を図るよう努めるものとした。

幼稚園教育要領を踏まえた創意工夫に基づく教育活動の充実としては、それぞれの幼稚園は、幼稚園教育要領を踏まえ、各幼稚園の特色を生かして創意工夫を重ね、長年にわたり積み重ねられてきた教育実践や学術研究の蓄積を生かしながら、幼児や地域の現状や課題を捉え、家庭や地域社会と協力して、教育活動の更なる充実を図っていくことが重要であることを示した⁽³⁾。

領域「環境」においては、日常生活の中で、わが国や地域社会における様々な文化や伝統に親しむことなどを「内容」に新たに示した⁽⁴⁾。また、文化や伝統に親しむ際には、正月や節句などわが国の伝統的な行事、国歌、唱歌、わらべうたや伝統的な遊びに親しんだり、異なる文化に触れる活動に親しんだりすることを通じて、社会とのつながりの意識や国際理解の芽生えなどが養われるようにすることなどを「内容の取扱い」に新たに示した⁽⁵⁾。

こうした幼稚園教育要領の改訂の趣旨を踏まえ、これからの幼児教育を担う保育者を養成するために、保育者養成校としてどのような授業内容を提供していけばよいだろうか。幼稚園教育要領が改訂されていくとともに、保育者養成校での授業内容についても工夫、改善をしてい

く試みが必要となってくる。

Ⅱ. 研究の目的

本研究では、保育内容「環境」における保育者養成校での授業内容について、先行研究を収集して検討することで、保育内容「環境」の授業が、どのような授業内容で、どういった授業方法を取り入れ、どのような創意工夫のもと行われているのかを検討して、授業内容の工夫、改善に生かすことを目的とする。

Ⅲ. 研究の方法

保育内容「環境」における保育者養成校で行われている授業の実践事例や授業内容等について取り上げている論文を収集、検討し、目的、授業内容、授業方法、授業の工夫などの観点から論文内容の検討をして、授業の工夫、改善の示唆や知見をまとめていく。論文の選定については、改訂された幼稚園教育要領が実施される平成 30 年前後に発表された論文を主に取り上げる。

Ⅳ. 保育内容「環境」における先行研究の収集と検討

保育内容「環境」における先行研究として、次の論文を取り上げて、検討を行うことにする。

①『現在の課題を踏まえた保育内容「環境」の指導法—学生の虫嫌いを緩和した身近な自然と親しむ保育を目指して』藤崎亜由子・廣瀬聡弥（2022）次世代教員養成センター研究紀要 8 巻 pp. 85-94

表 1：保育内容「環境」における先行研究（1）

目的	本論では、虫との関わりを通して自然や生命の豊かさを実感し、生物多様性への関心と関わりを醸成する保育を目指し、その担い手となる学生に伝えるべき内容を整理して実践プログラムを提案する。
参考	本研究では、「環境」の中でも特に生きものの世界に注目し、子どもたちが身近に触れ合うことができ、都市部にも存在する虫に焦点を当てる。虫に注目する理由を 5 つまとめている。 ・圧倒的な数と多様性。幼児は身近で動く虫に興味を示す。生活史が短く誕生から死までを繰り返し観察することができ、生と死に出会うことのできる対象である。生きもの同士のつながりを知る教材としても優れている。日本特有の虫文化。
授業内容	本論で提示するプログラムは、学生自身の体験を重視するものである。 ・園庭という身近な自然でも出会える虫に注目した。虫嫌いを緩和して身近な自然に触

	<p>れ合い、その美しさや不思議さ、多様性と生態を学ぶことを目的とした。理論と体験とを融合させたプログラムとした。ESDやSDGsについて触れ、今日的課題を踏まえた保育の在り方を考えた。人間社会や文化との接点も含めて包括的な視点を盛り込んだ。</p>
授業方法	<p>保育者が身につけてほしい知識、技能及び態度について、8つの観点から整理している。</p> <p>①他の生きものとの関係の中で人間を知る。</p> <p>②身近な生きものに気付く。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・プログラムでは、図鑑の中から頻繁に目撃できる代表的な虫を30種ほど示し、見たことがあるか、名前をしっているかを考えるワークを行い、改めて自身と虫の関係を振り返る機会を設けていきたい。 ・写真は自由に拡大縮小ができるため、実際の虫の大きさがわかりにくく、質感などがイメージしづらい面もある。それを補うためには、昆虫標本の活用が有効である。 <p>③生きものを知る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保育者を目指す学生は生物学を専攻しているわけではないことに留意し、身近な虫の生態に興味関心を抱き、それを遊びや生活に取り入れるとともに、子どもと一緒に探求していくきっかけとなるような知識を伝えるように心がけていきたい。 ・虫に興味をもってもらうきっかけとしては、擬態が有効である。 ・危険な虫についての知識は重要である。 <p>④生きもの同士のつながりを知る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・現在、世界には気候変動、生物多様性の喪失、資源の枯渇、貧困の拡大等人類の開発活動に起因する様々な問題があり、SDGsは経済・社会・環境の3側面から17のゴールを定めており内容は多岐にわたる。園庭に生息する生きものとの関連からみると、「15.陸の豊かさを守ろう」が最も馴染みが深い。その15.8には「2020年までに、外来種の侵入を防止するとともに、これらの種による陸域・海洋生態系への影響を大幅に減少させるための対策を導入し、さらに、優先種の駆除または根絶を行う」という項目がある。これは、生物多様性（生態レベル、種レベル、遺伝子レベルでの多様性）の保全課題でもあり、実は保育現場との関わり合いの深い項目である。 <p>⑤生きものの視点で世界や人間を捉える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・虫の視点を体感するきっかけとして、虫の眼カメラでとらえた昆虫写真などは大変魅力的な教材である。 <p>⑥人間文化とのつながり。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保育者にとって、絵本は保育教材として利用しやすい媒体であり、虫が苦手であっても導入しやすいツールである。

	<p>⑦死との出会いを考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・虫の死に対する子どもの態度としては、無頓着であったり嫌悪したりする場合もあれば、感情移入をすることもあるだろう。このような貴重な死との出会いを生命への学びへとつなげていく丁寧な関わりが求められる。 <p>⑧環境を通した保育と保育者の役割。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・水辺を含むビオトープがあれば、カエルやトンボなどの水生生物も生息し水辺の遊びが生まれる。 ・地域の自然と融合するような草木を植えたり、果樹や野菜などの作物を育てたりするような園庭づくりもまた重要な保育の営みである。 ・子どもに負けない好奇心や探求心をもった保育者とのかかわりの中でこそ、子どもが適切な生きものとの関わり方や知識を意味あるものとして学んでいくことができるだろう。
<p>授業方法</p>	<p>①保育内容「環境」と幼児を取り巻く現代的課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・幼稚園教育要領をもとに、SDGs や ESD とのつながりを考える。 <p>②身近な自然とのかかわり：園庭の生きものに気付く</p> <ul style="list-style-type: none"> ・園庭に生息する虫に気づき、その生態や生きもの同士のつながりを理解する。危険な虫について知る。 <p>③身近な自然との関わり：園庭の生きものを知る</p> <ul style="list-style-type: none"> ・虫の捕り方、危険な虫、応急手当について理解する。実際に大学内で虫捕りをする。 <p>④身近な自然との関わり：園庭の環境を活かした保育</p> <ul style="list-style-type: none"> ・捕獲した虫について共有し、概説を行う。 <p>⑤身近な素材や自然物を用いた保育の実際Ⅰ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自然物で作成した遊具や制作物を共有し、保育に活かせるアイデアや留意点を理解する。 <p>⑥身近な素材や自然物を用いた保育の実際Ⅱ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・宿題として、虫を捕獲し、飼育観察して調べた上で生態や遊び方、育て方をまとめて発表を行う。 <p>⑦子どもの発達と身近な環境との関わり</p> <ul style="list-style-type: none"> ・さまざまな保育施設の環境を知り、子どもが身近な自然と関わる環境と保育者の支援を考える。 <p>⑧虫との関わりと文化</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人間文化と虫との関わりについて学ぶ。虫絵本についても実際に読んで体験し、保育へ活かす力を身につける。

本論文では、虫との関わりを通して自然や生命の豊かさを実感し、生物多様性への関心と関わりを醸成する保育を目指し、その担い手となる学生に伝えるべき内容を整理して実践プログラムを提案している。そして、保育者が身につけてほしい知識、技能及び態度について、虫との関わりの中で、8つの観点から具体的に整理している⁽⁶⁾。保育者が身につけてほしい知識、技能、態度を身につけるための方法について具体的に示されており、虫と保育との関わりを考える上で、大いに参考になる。プログラム、昆虫標本、昆虫写真、絵本、ビオトープ、園庭づくりなど、具体的な教材とその効果についても示されており、多くの示唆に富む。

②『保育内容「環境」の指導法に関する一考察—持続可能な開発のための教育を目指して—』田中裕子（2022）鈴鹿大学・鈴鹿大学短期大学部紀要第5号 pp. 151-166

表2：保育内容「環境」における先行研究（2）

目的	保育者養成校での保育内容「環境」の指導法について、今後、ESDの視点を含めて考えていく必要性について明らかにすることを目的とする。本論では、「持続可能な社会の担い手の基盤となる能力・態度について（幼児版）」を使い、抽出した保育現場での「環境」の事例をESDの視点で分析をし、考察する。加えて、ESDを目指して、領域「環境」に関連する事例を基に効果的な指導のあり方について検討する。
参考	広島大学附属幼稚園においては、国立教育政策研究所教育課程研究センターの『学校における持続可能な発展のための教育（ESD）に関する研究 [最終報告書]』で示された「ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度（例）」を参考にし、幼児期における「ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度」を考え、「ESDで重視する能力・態度（幼児版）」を作成した。
授業内容	事例1「季節を感じるヨモギの採集とクッキングの援助」 〈本時のねらい〉 ・園内に生えているヨモギに関心を持つ。 ・友達と一緒にクッキングを楽しむ。 (ホットケーキミックスにヨモギを入れて、ホットプレートで焼く)
授業内容	事例2「夏野菜の苗植え」 〈本時のねらい〉 ・自分達で栽培する野菜を決め、野菜に対する興味・関心を高める。 ・地域の人と交流することで、親しみや感謝の気持ちを持つ。
授業内容	事例3「竹ぽっくりの竹」

	<p>〈本時のねらい〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 山で季節や自然を肌で感じる。 ・ みんなで協力して、4歳児の使う竹を準備する。 ・ 異年齢（4・5歳児）のかかわりを楽しみ、自然の中で思いきり身体を動かして遊ぶ。 （保育参加で保護者に「竹ぼっくり」を作ってもらおう）
授業内容	<p>事例4「七夕参加」</p> <p>〈本時のねらい〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「七夕さま」の歌を歌ったり、親子でふれあいを楽しみ、1学期の映像を見て成長を喜ぶ。 ・ 七夕の由来を知り、興味や関心を持って七夕製作に取り組む。 （1学期の姿をプロジェクターでみて、みんなで成長を喜ぶ） （七夕さまの歌を元気に歌って、おうちの人に披露する） （各保育室で親子で笹飾りを楽しむ）
授業内容	<p>事例5「流しそうめん」</p> <p>〈本時のねらい〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 流しそうめんを通して、4・5歳児の交流を図り、みんなで協力して楽しむ。 ・ 水は高いところから低いところへ流れることを学ぶ。 ・ 身近な竹で作ったそうめん台を大切に扱う。 （テラスに長い竹製の流しそうめん台を設置し、流しそうめんをする）
授業内容	<p>事例6「セミの羽化」</p> <p>〈本時のねらい〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 身近な自然に触れ、その不思議さに気づく。 ・ 偶然出合う「セミの羽化」に興味を持つ。 ・ 生命の尊さに気づき、いたわったり大切に擦る。 （偶然セミの羽化を子ども達と一緒に見る事ができた）
授業内容	<p>事例7「どんぐりころころ」</p> <p>〈本時のねらい〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 園外に出かけ、季節や自然を肌で感じる。 ・ 友だちと様々な「秋」の発見をして楽しむ。 （秋を見つけに、牛乳のバックをもって、神社へお散歩に行く）
授業内容	<p>事例8「みかん狩り」</p> <p>〈本時のねらい〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 秋の深まりを感じながら、身近な秋に親しみ、自分達でみかんを収穫する。

	<ul style="list-style-type: none"> ・「5個」数えてみかんを取ることで、数に関心を持つ。 ・自然の中で思いきり身体を動かして遊ぶ。 <p>(地域の方のみかん山に、保育園の4・5歳と一緒にみかん狩りにやって来た)</p>
授業内容	<p>事例9「側溝からごちそうが！」</p> <p>〈本時のねらい〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・落ち葉の感触を楽しんだりして遊ぶ。 ・目的をもって友だちと協力し、進んで掃除を行うことにより、達成感や満足感を得る。 <p>(側溝にたまった落ち葉や土を上げるのを、子ども達が遊び感覚で手伝う)</p>

本研究では、保育内容「環境」に関する具体的な事例について、ねらいや内容などを示して紹介している。事例は9つ紹介されており、ヨモギ、夏野菜、竹、セミ、どんぐり、みかんなど、主に自然に関わる内容が数多く示されている⁽⁷⁾。ESDの視点で分析して考察することで、ESDを目指した効果的な指導のあり方について検討しているところに特色がある。自然素材を活用した取り組みや、地域の方や異年齢と交流しながら活動することなど、保育内容「環境」の学習内容を考える上で、参考にすべき点が示されている。

③「領域の専門知識と保育構想をつなげる授業内容の検討(2)～領域及び保育内容の指導法に関する科目(環境)の授業実践から～」小林美沙子(2021) 島根県立大学・島根県立大学短期大学部教職センター年報 pp. 11-20

表3：保育内容「環境」における先行研究(3)

目的	本稿では、領域の専門知識と実践力を一体的に学ぶことができる授業内容について、ICT器機の活用について焦点を当て検討する。2020年度に筆者が短期大学部の授業として取り組んだ「幼児と環境」「保育内容・環境の指導法」の授業内容を取り上げ、学生が保育実践への活用をイメージしながらICT器機を活用して学べる教材について検討する。
授業方法	「幼児と環境」「保育内容・環境の指導法」の授業は、遠隔及び対面により実施した。遠隔授業については、Microsoftが提供するTeamsを利用し、リアルタイム配信により行った。また、演習や課題は、Web検索の利用、写真を挿入したレポートの作成、パワーポイントによる発表資料の作成など、ICT器機の活用が必須であるものを取り入れた。
授業の工夫	①演習科目を重視 ・領域「環境」の学びの特性を踏まえ、体験を通して気付く・考える機会を多く取り入

	<p>れた。演習内容は、直接体験することを重視し、「子どもがどのように環境との関わりを深めていくのか」を学生自身が体験から学べる活動を精選した。</p> <p>②振り返りの重視</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一人ひとりの学生が体験から気付く・考えることを大切にし、授業ごとに学生が授業内容を振り返る時間を設けた。 ・他者の考えや気付きを共有する機会として、グループ活動や ICT 器機を活用して記録をとることを取り入れた。
授業内容	<p>演習の内容</p> <p>野菜のアンケート、季節の生き物調べ、「生物多様性」の意味を調べる、自然物を使った遊び（カラスノエンドウ）、自分が夢中で遊んだ遊びの環境を考える、環境構成の意義と私の保育観について考える、育てたい夏野菜を決める、身の回りにある形を探す、土に触れる・鍬などの道具を使う、夏野菜を植える、野菜の観察と手入れ、看板づくり、学内フィールドビンゴ、模擬保育の話し合い、発表資料の作成、教材研究・模擬保育、模擬保育の発表と振り返り。</p>
授業内容	<p>身の回りにある形さがし</p> <p>課題として身の回りにある形を探す活動を提示した。課題はNHKのEテレ「ミミクリーズ」を参考に、子どもになって形を探すように促した。課題の作成については、見つけた形を写真に撮り、100字程度の説明文と共にレポートを作成させた。</p>
授業内容	<p>夏野菜の栽培活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・看板の設置 ・「夏野菜の生長記録」の作成 ・週に1回程度、授業内で作業を行う一方、グループごとに野菜の様子を写真に撮影するよう伝える。
授業内容	<p>模擬保育</p> <p>「身近な素材や自然物を使った遊び」に関する保育実践をグループごとに構想し、発表した。発表当日は、グループごとに実施した模擬保育の様子を資料にまとめ発表する形式とし、一部、遊び方などについてはその場で実際にやってもらった。また、発表後、質疑応答の時間を設け、模擬保育について振り返りを行った。</p>
参考	<p>今回の授業実践では、子どもが ICT 器機を活用する保育実践を構想するまでには至らなかった。また、学生が経験したことを記録するという作業においても、写真撮影が主であり、動画や音声などの他の方法も考えられた。そのため、学生が ICT 器機に親しみ、保育実践への活用をイメージしながら学べる教材について更に検討する必要があるだろう。</p>

本研究では、授業の工夫として、演習形式の直接体験を重視すること、振り返りの重視をすることを挙げている。領域「環境」の学びの特性を踏まえ、体験を通して気付く・考える機会を多く取り入れ、体験を通してどのような学びを得ることができたのかなど、振り返りについて重視している⁽⁸⁾。保育内容「環境」では、演習形式の授業内容が多くなる。学生が体験を通してどのような学びを得たのかを振り返ることで、体験から気付くことや考える時間を設けることができ、学生の学びは深まっていくであろう。また、模擬保育をグループごとに実施して、その様子を資料にまとめ発表するという授業方法を取り入れている。人数の関係で、一斉での模擬保育が難しい場合には、このような授業方法も参考にすることができるであろう。

④『「領域に関する専門事項」を含む「子どもと環境」に求められる授業プログラムの構築—学修者の主体的な学びにつながるポートフォリオの活用—』土井晶子(2020)共栄大学研究論集 pp.139-155

表 4：保育内容「環境」における先行研究（4）

目的	本研究の目的は、保育者養成課程における学修者の創造性を涵養する「領域に関する専門事項」を含む「子どもと環境」に求められる授業プログラムを構築することである。具体的には、1)「保育内容（環境）指導法」の授業実践、2) 保育現場での実践例の収集及び精選を行い、「領域に関する専門的事項（環境）」のモデルコアカリキュラムに基づき、授業プログラムの構築を行う。
授業方法	○授業毎の流れ 授業開始時 1) 毎授業にシラバスを配布し、学生への学修内容の意識化を図る。 ○授業実践時 2) 学生が履修すべき内容を「仮説」として明確に設定する。 3) 授業者の実践を「試行」として教授する。 ○授業終了時 4) 学修の定着を図るためにその日の授業に関連した「課題」を設ける。 5) その日の授業の学びと感想を記入した振り返りシート（リアクション・ペーパー）の提出を求める。 ○授業終了後 6) 仮説を検証し、学生の課題と振り返りシートに基づき、分析し省察を行い、次回の授業の方向性を決める。
授業内容	文字に興味をもたせるための「新聞で遊ぼう！「の」の字探し（平山 2015）」を取り入れて遊ぶ活動を実際に行い、体験的に学ぶ。

	具体的な活動内容は、新聞紙を1枚広げグループ毎(4人)で取り囲み、それぞれが異なる色マーカーをもって、「の」の字を見つけたら○をつける。遊び終わると、カラフルな水玉模倣ができる。
授業内容	各自で収集してきたどんぐりを使用して、どんぐりの処理方法を実際に行い、体験的に学ぶ。その後、「身近な素材や自然物を用いた保育の実際(計画立案)」で、どんぐりを用いた活動の指導計画を立てる。「どんぐりの収集」→「どんぐりを使った製作活動」→「その作品を使った遊び」というような節目のある活動の流れを体験的に学修できるよう授業を展開する。
授業内容	P 幼稚園(ハワイ州ホノルル市) 給食の残飯をポリバケツに入れ、畑の肥料として再利用している。
授業内容	I 幼稚園(ハワイ州ホノルル市) 郊外遠足で、地域コミュニティのプロジェクトに参加し、海辺のゴミ拾いを行う。それらのゴミを利用し、アート作品を製作している。また、環境問題を考える絵本の製作も行っている。
授業内容	ハワイ州ハワイ島の保育現場 ・幼児向けのSTEM教育という実践的な体験学習(①クロマトグラフィー、②カタパルト、③スライム作り、④家を建てる、⑤ホイルボード、⑥レインボーウォーク)が行われている。
授業の工夫	ポートフォリオを活用した学修 ・①授業毎のシラバス、②ノート(記録)、③(必要に応じて配布した)資料、④振り返りシート、⑤提出課題、⑥その他(成果等)を授業毎にインデックスを付けてファイルし、それを学修ポートフォリオとする。第14回の授業で集められたものが一冊のファイルに綴られて学修ポートフォリオとなる。 ・第14回の授業で、学修ポートフォリオ(13回分の①～⑥が綴られたもの)を用いて、学生自身が授業の到達目標に基づき、授業で何を学んだのか、その学修をどのように生かしていくのかについて、これまでの授業の振り返りを行い、全体振り返り記録を作成する。第14回目の授業終了時に、全体振り返り記録と学修ポートフォリオを提出する。

本研究では、授業方法に工夫が見られる。授業毎の流れとして、授業開始時にシラバスを配布して学習内容の意識化を図ったり、授業終了時に授業に関連した課題を設けて、振り返りシートの提出を求めたりしている。また、授業実践時には、学生が履修すべき内容を「仮説」として明確に設定したり、授業者の実践を「試行」として教授したりしている。ポートフォリオを活用した学修についても紹介されている⁽⁹⁾。授業毎の流れが一連として示されており、学生は何回か

授業を経験することで、授業の流れを理解して、スムーズに授業を受けることができるであろう。また、ポートフォリオを活用した学修を行うことで、学生自身が授業の到達目標に基づき、授業で何を学んだのか、その学修をどのように生かしていくのかなど、授業の振り返りができるように工夫されている。

⑤『「保育内容（環境）」の講義内容と学生の学びに関する一考察』田中卓也（2020）スポーツと人間：静岡産業大学論集 4 巻 1 号 pp. 125-132

表 5：保育内容「環境」における先行研究（5）

目的	本研究では、本学の保育士専攻課程に所属する 19 名の受講した「保育内容（環境）」の講義を通して、学生にいかに関心を持たせながら、学ばせるとよいのかについて考察・検討を試みるものである。
教育内容	○さつまいもを食材としてとりあつかった「感動レシピ」の作成 さつまいもの収穫は、天気および日程の都合で実施されなかったが、事前に収穫されたさつまいもを受講学生に配布し、2 週間の期間で各自調理した内容などを記載する課題を与えた。文章の執筆だけでなく、絵の描画、写真の掲載も認めている。2 週間後の講義時に提出させ、講義時間のおよそ 3 分の 1 時間を使用して、4 人グループの仲間でそれぞれ説明や紹介を行い、意見や質問、気づきについて、互いに述べるという流れで行った。
教育内容	○秋の虫、花探しに出かけよう！ 学外のフィールドワークに出かけ、散策などで得られた学生個々の発見や気づきなどを参考にしながら、「キャンパス周辺自然マップ」を作成する。保育のなかで子どもが自然環境とかかわるためには、「秋の虫には、どのようなものがあるか」、「この花は何という花なのか」など、保育者の配慮やかかわりがなぜ必要なのかを考えるためのよいきっかけづくりとした。
教育内容	○まちの安全は保育者から！—さまざまな標識をみつけだし、意味を考える— 学生 6 人の 2 グループに分け、大学周辺の各地域のブロックごとに散策させ、標識、交差点、歩道などの危険な箇所などを調査させ、プレゼンテーション発表をさせた。

本研究では、保育内容「環境」の具体的な授業内容について、さつまいもの収穫と調理、秋の虫や花探し、標識の意味などの内容が示されている⁽¹⁰⁾。栽培した野菜を収穫して調理するなど、人数の制約や時間の関係で、調理実習をすることが難しいこともあるだろう。各自で調理した内容を記載して、グループ内で説明や紹介を行っていく方法は、こうした制約にとらわれずに実施

することが可能となる。また、学外のフィールドワークや大学周辺の散策など、演習活動を積極的に取り入れている。19名の受講数という少人数の授業であれば、こうした演習活動を取り入れやすく、参考にすることができる。

⑥『保育内容「環境」の体験による学びに関する研究—泥んこ遊びを通して—』青山裕美（2020）名古屋短期大学研究紀要 58号 pp. 35-48

表6：保育内容「環境」における先行研究（6）

目的	本研究は、学生の遊びの体験による学びを『子ども理解』と保育内容の『領域「環境」』の視点で検討し、体験による学びの効果を明らかにすることを目的に行う。
参考	客観的にわかることよりも子どもの遊びを体験し、目に見えない子どもの心の動きや思いを自身で実感することの方が子ども理解には必要である。自身で実感したことをもとに子どもの気持ちがわかるという経験は、もっと子どものことを知りたいという欲求のもととなり、主体的に学ぶ姿勢に結び付くであろう。学生が子どもの遊びを体験することは、「子どもを理解する」ことを学ぶことなのである。
授業内容	<p>泥んこ遊びの当日の授業の流れは次の通りである。</p> <p>①事前に帽子、水分などの用意や動きやすく汚れてもよい服装で参加するよう指示をする。</p> <p>②場所は学校の何も栽培されていない畑（通常は野菜等の栽培に使用）の4畝を使用する。</p> <p>5～7人で7グループにする。グループごとに畝をはさんで向き合う形で入り、砂場遊び用玩具を使用して遊ぶことを話す。</p> <p>③泥んこ遊びを始める前には、以下の2つのことを指示した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・概ね4歳の幼児が遊ぶことを想定しながら遊ぶ。 ・自分自身で身体と心を動かして遊ぶ。 ・遊びを通じた自分の経験をもとに4歳の子どもの内面を想像する。 <p>④はじめは砂、土だけで遊び、途中から水を使って遊んでもよいと声をかけた。途中、休憩や水分補給などを自分の判断で取るように指示をした。</p> <p>⑤おおよそ1時間程度遊んだところで、泥んこ遊びは終わりとして玩具を片付けるように声をかけた。</p> <p>⑥玩具は洗って片付け、畝は元の状態に戻すように指示をした。</p>
参考	授業の翌日、遊びの過程の記録や感想を記述した学生のノートの提出を64名から受けた。学生は最終的には満足する授業であったと記述していたが、当初に授業で泥を触る

	ことや戸外で体験することに抵抗感を持ち、消極的だったという旨の記述をしていた学生が半数近く見られ、遊びを体験することで学生の心情が変化したことがうかがえた。
参考	事前に何を学ぶべきかを指示はせず、計画通り玩具を置き、畑に水を撒いたり水を運べるようにしただけであったが、学生は泥んこ遊びの体験の中から主体的に領域「環境」の内容を学び取っていた。

本研究では、学生が子どもの遊びを体験することは、「子どもを理解する」ことを学ぶことという趣旨の基、学生の遊びの体験による学びを『子ども理解』と保育内容の『領域「環境」』の視点で検討し、体験による学びの効果を明らかにすることを目的に授業を行っている⁽¹¹⁾。授業内容については、泥んこ遊びという、とてもダイナミックな授業実践である。授業実施後に提出された学生のノートを分析して、学生の心情の変化を読み取っている。授業開始前と後など、授業を体験する中で、学生にどのような意識の変化があったかを分析していくことで、授業内容の検証に生かすことができるだろう。

⑦『保育内容「環境」における地域マップ作製の教育的効果』岩崎淳子・金玟志（2020）教職課程センター紀要5巻 pp. 93-101

表7：保育内容「環境」における先行研究（7）

目的	保育者養成課程の保育内容「環境」指導法の授業で取り扱った内容を吟味し、その教育効果を検討することから専門性を踏まえた今後の授業展開に活かしていく。
授業内容	<p>フィールドワークを実施し、地域を身近な環境としてとらえ自然環境や物的環境に注目できるように「おでかけビンゴ」を完成しながら地域マップの作成ができるように促した。</p> <p>○フィールドワーク授業の実施に関して</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学生には前もって自宅の周辺、もしくは大学の周辺を30分程度歩いてもらった（フィールドワーク1回目）。特に、乳幼児向けの散歩マップを想定したものとして地域マップが作成できるように、学生自身が乳幼児の目線をもって取り組むことが重要であると説明した。 ・次に、一週間のうちに「おでかけビンゴ」の題に沿って物を見つけながら2回目のフィールドワークが実施できるように促した。 ・さらに、発見した動植物等においては、それについて調べるように促し、地域周辺の自然環境にも注目できるように指導した。 ・最後に、地域マップ作製時には、地図のどの辺りで見つけたのか印をつけると共に、

安全面において配慮が必要な場所も書き込むように指導した。

本研究では、フィールドワークを実施し、「おでかけビンゴ」を完成しながら地域マップを作成する活動を行っている。乳幼児向けの散策マップを想定した地域マップの作成ということで、学生自身が乳幼児の目線をもって取り組むことが重要であることを説明している⁽¹²⁾。フィールドワークを実施することは多くの授業で行われていると思うが、それがどのような目的で、どのような視点をもって行っていくのかを十分に説明することで、学生は目的意識を持ってフィールドワークに行くことができるであろう。

⑧『保育内容「環境」におけるプロジェクト活動』大宮摂子（2018）愛知淑徳大学論集、福祉貢献学部篇 8号 pp. 28-43

表 8：保育内容「環境」における先行研究（8）

授業方法	<ul style="list-style-type: none"> ・ 筆者は、主題（テーマ）があり、協同で取り組む、一日で終わらない主体的な探究活動をプロジェクト活動と定義づけし、その指導計画と実際の方法、保育内容「環境」でのあり方、保育者としての役割などはどのようなべきかを、3歳児以上の子どもに限定して研究することにした。 ・ 学生が参加してのプロジェクト活動の体験学習を実施し、プロジェクト活動の有効性と問題点を検証した。
目的	<p>学生が「子どもの主体的な活動」をどのように捉えて、援助していくのかという、保育者の視点を養うために、以下の3点の理由から教育実践を通して体験学習の有効性を明らかにすることが目的である。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 学生自らが観察し体験することで、活動のプロセスを理解する。 2 子どもの興味・関心から発生したテーマ（主題）の援助方法を把握する。 3 学生が協同的に体験することで学生自身の学びの場となる。
授業内容	<p>体験学習として、専門家から五感で感じるネイチャーゲームを学び、その後、振り返りをし、次の「おさんぽマップづくり」のテーマを決め、プロジェクト活動として協同的に活動をする体験を行った。</p>
授業内容	<p>○自然のビンゴゲームの遊び方</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 花にも色がある。音にも小鳥のさえずりや虫の声などいろいろある。木にも縦縞の模様やら横縞やら点々とか柄がある。曲がった物や匂いもよい香りのものや臭い匂いの物など様々あるので色々な物を探してビンゴを作っていく遊びである。五感を刺激しながら、色々な発見を楽しむことができ仲間づくりにもなる。

授業内容	<p>○「おさんぽマップづくり」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「おさんぽマップづくり」の各グループの主題（テーマ）を決定する。 ・7つのグループがそれぞれ自分たちの考えたテーマで「身近な自然マップ」「交通安全マップ」「町の標識やお店屋マップ」「親子で楽しむ自然体験」等、テーマも表現も様々で、子どもとつくるもの、親向けに掲示するもの等作成していた。 ・各グループで共同制作したものを発表し、他のグループからの意見をもらう形式で行った。
------	--

本研究では、自然のビンゴゲーム、おさんぽマップづくりの授業について紹介をしている⁽¹³⁾。フィールドワークを通して地域のマップづくりをする授業はよく見られると思うが、本授業では、自分たちの考えたテーマでマップを作成している。自然マップ、交通安全マップ、標識やお店屋マップなど、テーマによってマップを作成する視点は異なってくるといえる。各グループで共同制作したものを発表し合うことで、完成された様々なマップを見ることができ、おさんぽマップを、保育現場でどのように生かしていくのか参考にすることができるだろう。

⑨『保育内容「環境」に関する教材研究—光る泥団子をテーマにした「卒業課題研究」における取り組み—』春原淑雄（2022）西九州大学短期大学部紀要 52 巻 pp. 73-82

表 9：保育内容「環境」における先行研究（9）

目的	本稿では、2019 年度から「卒業課題研究」で継続展開してきた泥団子研究の内容と成果の一部を報告するものである。主な報告内容は、泥団子作りの教育的な意味と、光る泥団子の制作方法の開発（教材研究）である。
参考	<p>泥団子作りの教育的な意味</p> <ul style="list-style-type: none"> ・泥団子作りは物質の性質理解や思考力の芽生え、さまざまな感性が育つ遊びであり、幼児期の子どもに相応しい学びの体験を保障する教材だといえる。
授業内容	<p>「普通の土で作る」光泥団子の制作工程</p> <p>①土台作り</p> <ul style="list-style-type: none"> ・団子の中心部分を作る（所要時間：5～10分） <p>②球体作り</p> <ul style="list-style-type: none"> ・土をかけながら丸くする（所要時間：30～40分） <p>③皮膜作り</p> <ul style="list-style-type: none"> ・表面をこすり、きれいな皮膜にする（所要時間：60分～） <p>④磨き上げ</p>

	・布でみがき、光らせる（所要時間：適宜）
授業内容	「漆喰で作る」光る泥団子の制作工程 ①土台作り ・団子の中心部分を作る（所要時間：3～4日） ②土台作り ・ピンを使って丸くする（所要時間：20～30分） ③中塗り ・中塗りをして団子の表面を滑らかにする（所要時間：30～40分） ④着色 ・団子に色づけした漆喰を塗る（所要時間：20～30分） ⑤磨き上げ ・ピンでみがき、光らせる（所要時間：10分）

本研究では、保育現場でよく行われている泥団子を制作する取り組みについて紹介している⁽¹⁴⁾。制作過程が分かりやすく説明されており、泥団子作りの参考にすることができる。また、「普通の土で作る」光る泥団子、「漆喰で作る」光る泥団子という2種類の制作工程が示されており、完成した写真も掲載されている。泥団子作りの教育的意義も示されており、保育現場で泥団子作りを取り上げる上で、参考にすることができるであろう。

V. 総合考察

保育内容「環境」における保育者養成校での授業内容の全体的な特徴として、演習形式の授業が数多く行われている。小林（2021）は、領域「環境」の学びの特性を踏まえ、直接体験することを重視して、子どもがどのように環境との関わりを深めているのかを、学生自身が体験から学べるように活動を精選している⁽¹⁵⁾。青山（2020）は、子どもの遊びを体験し、目に見えない子どもの心の動きや思いを自身で実感することが子ども理解には必要であり、学生が子どもの遊びを体験することは、「子どもを理解する」ことを学ぶことなのであると述べている⁽¹⁶⁾。

子どもの遊びを体験して、直接体験しながら子ども理解を学んでいくために、保育内容「環境」では、野菜栽培、フィールドワーク、泥んこ遊び、泥団子作りなど、多くの演習形式の体験活動が行われている。そして、体験だけで終わるのではなく、振り返りの時間を設けていることが特徴として挙げられる。振り返りの仕方については、グループ活動やICT器機を活用して記録をとること、振り返りシートの提出を求めること、遊びの過程の記録や感想を記述したノートの提出を求めることなど、それぞれの授業で工夫した取り組みが行われている。体験を通して、子ども理解を深めた後、授業の振り返りをしていくことで、子どもの心の動きや思いを自身で実感し、より子どもの気持ちを理解す

ることにつながるのであろう。そして、それが、子ども理解に立った保育実践へとつながっていくであろう。

土井(2020)は、「子どもと環境」に求められる授業プログラムを構築するために研究を行っている。この授業では、授業毎の流れが定められており、学生は何回か授業を行う中で、授業のやり方を理解して、毎回の授業をスムーズに受講することができるようになるだろう。また、授業終了後に課題や振り返りシートの提出を求めることで、学生の授業の理解度を把握することができ、分析し省察を行うことで、次回の授業に生かすことができるだろう⁽¹⁷⁾。このように授業毎の流れをシステム化するような試みは、学生と教員、双方にとって利点もあり、今後の参考にしていきたい。

フィールドワークの授業では、地域マップの作製や「おさんぽマップづくり」といった活動が行われている⁽¹⁸⁾⁽¹⁹⁾。プロジェクト活動として実施をして、その有効性と問題点を検証することなど、研究の視点を持ってフィールドワークを実践していくことは参考にしていきたい。どのようなテーマ設定をして、どういった目的をもちながらフィールドワークに行くのかを明確にしていくことで、学生は、目的意識を持って学習に臨むことができるであろう。

藤崎・廣瀬(2022)は、保育内容「環境」の中で、特に生きものとの関わりについてまとめており、保育者が身につけてほしい知識、技能及び態度について、生きものとの関わり観点から8つに整理している。また、プログラム、昆虫標本、昆虫写真、絵本、ビオトープ、園庭づくりなど、具体的な教材やその有効性についても示されており、保育内容「環境」の中で、生きものを取り上げる上で、多くの示唆を富む⁽²⁰⁾。

小林(2021)は、保育内容「環境」の授業内容において、学生が保育実践への活用をイメージしながらICT器機を活用して学べる教材について検討している。今回の授業実践では、子どもがICT器機を活用する保育実践を構想するまでには至らなかったと述べている。教育現場にもICT器機の導入が進められ始めている。保育実践でのICTの活用については、引き続き研究をしていく試みが必要になってくるであろう⁽²¹⁾。

VI. おわりに

本研究では、保育内容「環境」における保育者養成校で行われている授業内容について、先行研究を収集して検討することで、保育内容「環境」の授業が、どのような授業内容で、どういった授業方法を取り入れ、どのような創意工夫のもと行われているのかを検討して、授業内容の工夫、改善に生かすことを目的に研究を行った。

収集した先行研究については、目的、授業内容、授業方法、授業の工夫などの観点から論文内容の検討をして、授業の工夫、改善の示唆や知見についてまとめていった。

検討の結果、保育内容「環境」における保育者養成校の授業では、演習形式の授業が多いことが特徴として挙げられること。授業の振り返りの仕方を工夫する必要があること。授業方法には

様々な創意工夫が見られること。体験活動など特色ある授業内容が行われていること。保育実践でのICTの活用については今後の課題であることなど、多くの示唆を得ることができた。本研究で検討したことを基に、授業の工夫、改善に生かしていきたい。

引用・参考文献

- 1) 文部科学省 (2018) 「幼稚園教育要領解説」 p.2
- 2) 文部科学省 (2018) 「幼稚園教育要領解説」 p.3
- 3) 文部科学省 (2018) 「幼稚園教育要領解説」 p.4
- 4) 文部科学省 (2018) 「幼稚園教育要領解説」 p.7
- 5) 文部科学省 (2018) 「幼稚園教育要領解説」 p.7
- 6) 『現在の課題を踏まえた保育内容「環境」の指導法—学生の虫嫌いを緩和した身近な自然と親しむ保育を目指して』藤崎亜由子・廣瀬聡弥 (2022) 次世代教員養成センター研究紀要 8 巻 pp.85-94
- 7) 『保育内容「環境」の指導法に関する一考察—持続可能な開発のための教育を目指して—』田中裕子 (2022) 鈴鹿大学・鈴鹿大学短期大学部紀要第 5 号 pp.151-166
- 8) 「領域の専門知識と保育構想をつなげる授業内容の検討 (2) ～領域及び保育内容の指導法に関する科目 (環境) の授業実践から～」小林美沙子 (2021) 島根県立大学・島根県立大学短期大学部教職センター年報 pp.11-20
- 9) 『「領域に関する専門事項」を含む「子どもと環境」に求められる授業プログラムの構築—学修者の主体的な学びにつながるポートフォリオの活用—』土井晶子 (2020) 共栄大学研究論集 pp.139-155
- 10) 『「保育内容 (環境)」の講義内容と学生の学びに関する一考察』田中卓也 (2020) スポーツと人間：静岡産業大学論集 4 巻 1 号 pp.125-132
- 11) 『保育内容「環境」の体験による学びに関する研究—泥んこ遊びを通して—』青山裕美 (2020) 名古屋短期大学研究紀要 58 号 pp.35-48
- 12) 『保育内容「環境」における地域マップ作製の教育的効果』岩崎淳子・金玟志 (2020) 教職課程センター紀要 5 巻 pp.93-101
- 13) 『保育内容「環境」におけるプロジェクト活動』大宮摂子 (2018) 愛知淑徳大学論集、福祉貢献学部篇 8 号 pp.28-43
- 14) 『保育内容「環境」に関する教材研究—光る泥団子をテーマにした「卒業課題研究」における取り組み—』春原淑雄 (2022) 西九州大学短期大学部紀要 52 巻 pp.73-82
- 15) 同上 8)
- 16) 同上 11)

- 17) 同上 9)
- 18) 同上 12)
- 19) 同上 13)
- 20) 同上 6)
- 21) 同上 8)